

もみじ、そして椿と一年中の四季をそれぞれに楽しむことができる。花も緑もない冬枯れの景色が又趣があり、日本人だけでなく海外から遠路はるばる外国人もやってくる。「私の好きな庭は、



▲ 京都府の「魚楽園」

冬の朝、一面に雪で真っ白に化粧した庭です。幼い頃、その美しさのなかで雪に触れ、飛び回りました。」と長女の敬子さん。運縁と運縁によって手入れを監視されているが、「庭を守ることは祖先を守ることでした。けれど、これから時代の流れのなかでどう管理していくか、大きな課題」と当主の藤江千代美さん。

◎日本文化を今に継ぐために。

昭和53年9月、国の名勝園園に指定され、その価値が認められた。毎年秋には魚楽園を次世代へ継いでいこうと結成された魚楽園継承会主催で「雪舟さんの紅葉まつり」が行われ、地域の方たちをはじめ多くの方々が、雪舟園を訪れる。さらに川崎町では、水邊画公墓園が隔年毎に開催され、今年は、町制70周年記念事業として、第5回画が行われる。

魚楽園は江戸末期の漢学者村上耕山によって中国の詩経の中の「魚楽しければ、人また楽し」という文から名付けられた。人も魚も魚たちもすべてが大自然のなかに調和し、とけ込んだ情緒を意味しているとか、130年前の文久(1862年)のこと。自然の移り変わりがそのままに凝縮された魚楽園。自然のあり方と人間のあり方を問われているような気がしてならない。



▲ 当主の藤江千代美さん



▲ 紅葉の雪舟園

